

オーストラリア原住民の
親族組織と人口構造

— 多元的法体制論の前提作業 —

金城 秀樹

未開社会のすべてを覆っているかの如き親族関係については、あたかも複雑なパズルを解くに似ているが、レヴィーストローヌはこれを集団間の女性の交換の規則として捉え、交叉イトコ婚を共同体間の統合を期するものと解する考え方を示した。しかし、オーストラリア原住民の親族組織には二分組織、四セクション組織、八亜セクション組織があり、なぜ、あちらでは二分割であり、こちらでは八分割なのかの発生要因を説明しえず、また、部族概念を同じ言語を話すにすぎない単なる言語共同体としてしか提示しえないことが指摘される。A・A・イエングヤンはオーストラリア大陸の沿岸から内陸の砂漠地帯へ向かうにつれて、部族テリトリー面積の漸進的拡大、部族集団の人口の漸進的拡大、社会的分割数の漸進的拡大を実証的に明らかにし、また、優先婚が有効に機能した場合の人口数を数学的に決定しようと試み、カリエラ型のセクション・システムではおよそ五三〇名、アランダ型

の亜セクション・システムでは一〇七〇名との試算を示した。M・J・メギットは、亜セクション・システムのワルビリ族はおよそ一四〇〇名であり、優先婚に従った結婚は九一・六パーセントと報告し、同じ亜セクション・システムのアングラ族は、M・リエーの調査によれば、それは五七・九五パーセントにすぎず、その人口数は二八八名と報告した。さらに、メギットは、分解過程にあるオーストラリア原住民社会における人口数の変化が、セクション・システムに何らの変更も来していないことを示して、セクションを婚姻クラスと把握することに異論を唱えた。では、かかる社会的分割が存在する意味は何か。

M・ゴドリエは、未開社会における親族関係の多価機能に注目し、親族が、政治関係宗教関係であるとともに、生産関係としても機能することを主張し、親族関係を最終審級としての生産関係として取り出す作業を行った。ゴドリエによれば、狩猟採集民にとって、生態学的環境がより悪化するにつれ、食糧資源の入手可能性が破局的になる危険が増し、地域集団（ホールド）の存続のためには、一層広範な地表のうえでの移動性の増大とともに、隣接の地域集団の占有するより好ましいテリトリーへの接近の権利、ないし互酬的保証を持つことが不可欠であり、厳しい環境条件の下で生き残る能力は、土地利用集団（ホールド）に最大限の移動性を可能にするような、地域集団の組織における種の柔軟性と、さらに、セクション、亜セクションを通じて多数の個人をあるネット・ワークで結びつける手段とを必要とする、と言う。これが

互酬的な社会関係であり、可視的には親族関係として示され、この社会関係の外延こそ生産関係の枠組みであり、部族としての紐帯であると主張する。広大なテリトリーに散在する同一部族内の地域集団が、遠隔の地域集団に接触することが稀あるいは全くないにも係わらず、また、部族全体を統合する政治組織あるいは権威が存在しないにも係わらず、社会的実体としての部族を部族構成員が自覚しているとのJ・B・バードセルの報告がゴドリエの論証を補強する。他方、親族関係が、婚姻を規則づけ、儀礼活動の社会的枠を提供し、人間相互間の関係と自然との関係を表現するイデオロギー的図式としても機能することも指摘する。G・C・フォン・ブランドンシュタインのセクションとトーマス出自帰属の分析から、各セクションの機能は儀礼的実践のうちに基礎をおきつつ、他の全てのセクションとに依存しており、世界秩序の象徴的再生産は、所属するセクションでの固有な課題を遂行することによってなし遂げられ、ここでの諸個人の互酬的、全般的協業が生産関係における協業と形式的に同一であるとし、親族関係における生産関係と上部構造を明らかにした。

未開社会研究の対象たる社会は、現実には分解過程にあり、早くもラドクリフ・ブラウンが指摘したように、狩猟採集民たる原住民の賃労働化により、従来の生産関係も破壊過程にある。文明との接触により人口数が激減し、政策的配慮により再び人口数が増大したとしても、賃労働化という下部構造の変化が従前の原住民社会を復活させることを妨げ、儀礼の復活が集団の文化的同一

意識の再確認であるとしても、その機能は従前と同一のものではありえない。かかる未開社会の解剖による筆者の関心は、法人類学の中心課題である多元的法体制 (legal pluralism) にいう国家法と固有法の二重構造を如何に調和させるかという困難な問題状況のなかで、オーストラリア原住民社会に残存する、従来の生産関係から遊離したイデオロギーとしての慣習法の存在意義、資本主義法たる国家法への吸収の可能性を追求することにある。

(札幌大学・オーストラリア法)